

研究所だより

とよなか都市創造研究所

平成 23 年(2011 年)11 月 Vol.2

関係セクションと連携して研究を進めています

今回、連携という視点から研究所の活動をご紹介します。研究者というと、終日文献や資料を読んでいるようなイメージがありますが、研究所のテーマは、現状を把握し課題を分析することから研究が始まりますので、研究活動はフィールド調査とデータ収集が中心です。調査対象は、市民の皆さま、市内の職員、他自治体の職員など広範囲にわたり、皆さまのご協力なしには研究は進みません。今年度のテーマについても、それぞれに他の部署や地域の方々とのつながりをもちながら活動しています。各テーマが市政や市民生活とどう「つながっているか」について各研究員に語ってもらいました。

◆ (基幹研究) 若年層 (高校生) の地域活動の推進の要件と地域コミュニティの考察 (Ⅲ)

今年度のテーマは、若年層の地域活動や地域コミュニティのあり方についてです。これは今後の地域社会を展望する中で、避けてとおれない課題となっています。

その課題を分析するために、高校生と地域との交流を促進・活性化させるにはどうしたらいいのか、その阻害要因やヒントを探るため、市内の高校を訪問し、学校体制の実態について調査しています。

そもそも私が高校と関わりを持ちはじめたのは、教育委員会地域教育振興課(現地域教育振興室)で、事業企画を持って高校まわりをしていた頃にさかのぼります。どの学校の先生も丁寧に話を聞いて下さいましたが、「よっしゃ！やってみよう↑」「みんな忙しいからねえ↓」と反応は様々でした。

あれから 5 年。学校(教諭)が地域をどのように捉えているのか、また学校は高校生と地域との橋渡し役を担えるのかについて探るため、8 月から 9 月にかけて、豊中市内にある府立高校全ての学校長にインタビューさせていただきました。その中で感じたことが 2 点あります。

1 つは、地域連携が進められてきた学校と全くされてこなかった学校との違いが大きいことです。5 年前は、手探り状態で地域連携を進めてきた学校も、今では軌道に乗り、活発な活動内容に驚かされ、5 年間の重みを実感しました。

2 つ目は、以前とは異なり、どの高校も積極的に地域との接点を求めているという点です。今、高校は地域特性を活かした「特色ある学校づくり」に向けた取り組みが進められています。そのためにも、豊富な経験や知識、技術をもった地域の人たちからの伝統的な行事の伝承や交流、様々な分野の学びが期待されています。

豊中市内にある高校は、どの学校も様々な特徴や特性があり、地域との連携を進めるなかでその魅力を存分に発揮できる可能性を秘めています。

その一方で、大学への進学や進路指導に重点をおき、地域との連携が総体的に進んでいないのも現実です。

少子高齢社会や人口減少社会、都市化が進むなかで家族形態の変化し、地域の希薄化に拍車がかかっています。子どもや高齢者の虐待、孤独死も増加し、いわゆる孤立社会や無縁社会が懸念されている今、新たなコミュニティのあり方として、担い手の確保や高校との連携は、まさに今が旬であると心に深く感じました。(岩佐)



◆（基礎研究）「とよなかのすがた（仮題）」～数値から見た豊中市の現状把握～

データブック『とよなかのすがた（仮題）』の編集作成にあたっては、市職員による横断的な編集委員会を立ち上げ、平成23年11月現在までに2回の全体会議と個別調整会議を実施してきました。編集委員は、総務部1名、人権文化部1名、環境部1名、市民協働部2名、健康福祉部2名、都市計画推進部1名、教育委員会3名、豊中市伊丹市クリーンランド1名の計12名の若手職員で、バラエティーあるメンバー構成となっています。これまでの進捗は、各種の計画策定や事業実施に携わってきた委員の実践的な経験や知識を踏まえながら、生涯学習、福祉、都市計画などのトピックごとにどういっ

た情報やデータを掲載すべきかの選定を進めています。

これまでの研究事業も、関係部局の意見を聞きながら進めてきましたが、知りたい時に知りたい事を必要な分だけ手に入れるといったアプローチだったと思います。しかし、連携事業の推進とは（まあ同じ役所内ですが…）、主体性だけが合理的な選択ではないのかもしれませんが。そのような意味において、『とよなかのすがた（仮題）』の作成は、従来の研究事業とは異なる成果をもって、市政に貢献できるかもしれないと期待しています。（村山）

◆（基礎研究）豊中市の活力・魅力づくりに関する調査研究

本年度の豊中市の活力・魅力づくりに関する調査研究は、豊中市政策企画部都市活力創造室と連携することで進められてきました。同室では「豊中ブランド創出」を検討しているため、それに役立てられるような情報収集を当研究所で行っています。

まず、「豊中ブランド創出」を行う際に重要な考え方となる、「地域ブランドマネジメント」について既往研究を整理しました。ブランド、という言葉を知ると、どうしても商品がまず思い浮かぶと思います。しかし、ブランドを戦略的に作る際には、商品・サービスを先にブランド化する場合と、イメージを先にブランド化する場合の2つがあります。そして、ブランド商品・サービスはブランドイメージを豊かにし、ブランドイメージはブランド商品・サービスを創造・発展させるという、補完関係にあることが既往研究から明らかになりました。

都市活力創造室との連携体制を考慮すると、ブランドイメージ、ブランドコンセプトにまず迫る必要があるため、次に、庁内資料の整理と豊中市民の皆さんへのヒアリングを実施しました。その結果、前者からは、「郊外」・「交流」・「共生」住宅都市である豊中市においては、みどり豊かな景観はもちろんのこと、密接な近所づきあいや食と文化的活動も魅力として有望であることが仮説として浮かび上がってきました。また、後者からは、「愛着」・「歴史

と文化」・「文化的活動」・「子育て環境」・「気軽」というようなキーワードが得られました。

現在は、上記のような仮説・キーワードなどに配慮して、市内外の一般の方向けのインターネットアンケートを設計しています（図1のフェーズ1に相当）。その結果を、都市活力創造室の豊中ブランド創出の際の基礎資料として情報提供する予定です。

（大床）

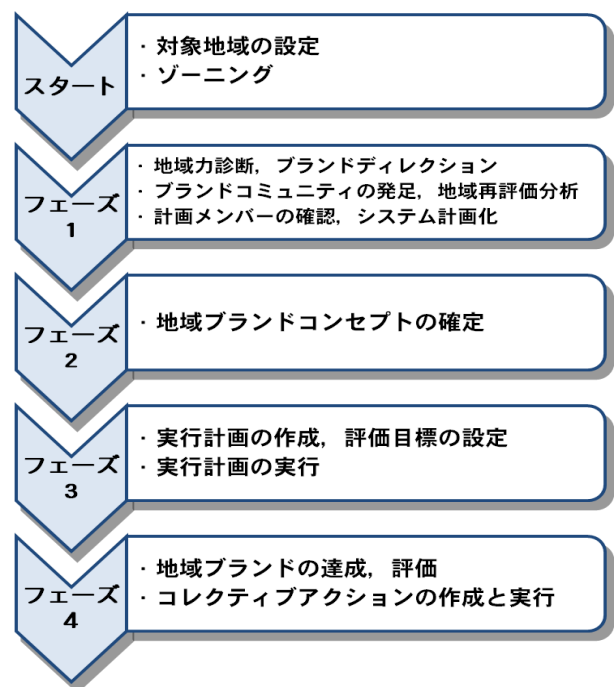


図1：地域ブランドマネジメントの手順

とよなかのすがた 三二 医療カバー人口割合の巻

統計数値を中心として、今後の市政に資する豊中市の現状を考えてみるコーナーです。

前号の「とよなかのすがたミニ」では、流出や流入といった人口移動を取り上げて、豊中市の現状や課題を検討した。そして、今号では、救急医療機関から一定距離内の人口規模（以下、カバー人口割合）より、平成 22 年 1 月に救命力世界一を宣言した豊中市の現状を考えてみる。

カバー人口割合とは、各病院からの一定距離圏内の合計人口が市の総人口に占める割合である。分析では、平成 17 年国勢調査の町丁別人口を用いており、病院からの距離は各町丁の重心点までの距離とした。また、大阪府医療機関情報システムのホームページ¹によると、豊中市内では 9 つの病院が、内科、外科、脳神経外科、小児科などの救急診療を受け入れている。ここでは、それらの中から内科の救急診療を実施している病院のカバー人口割合をみていく。

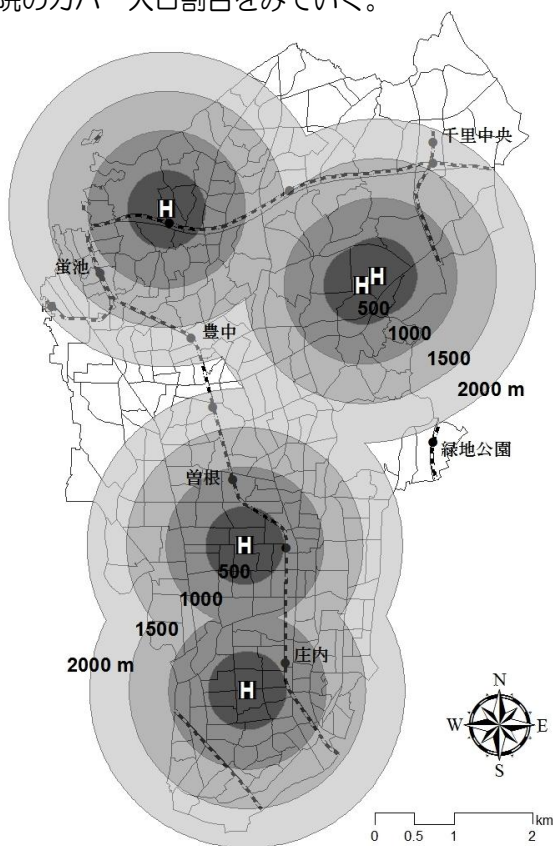


図 1 救急病院（内科のみ）の分布と距離

図 1 は、内科の救急病院の分布と、2km までの同心円による病院からの距離を図示している。北から順に、市立豊中病院、東豊中渡辺病院、豊中若葉会病院、豊中渡辺病院、上田病院が内科の救急診療を受け入れて

いる。そして、それらの病院から 2km 圏が市域の大部分をカバーしており、さらには、2km 圏外の市北東部であっても、市立算面病院が近接している。つまり、豊中市のほぼすべての居住地は、最寄りの救急医療機関まで最長でも 2km 以内にある。

つぎに、豊中市と北摂他市とのカバー人口割合を比較してみる。図 2 のグラフは、内科の救急病院がある 7 市のカバー人口割合を、1、1.5、2km 圏ごとに集計している。ここでは、市内救急病院のカバー人口割合のみを集計しており、隣接する他市内の救急病院の影響は含んでいない。結果、北摂 7 市間の比較においても、豊中市の 2km 圏カバー人口割合が優れているのがわかる²。また、1km 圏の割合が北摂平均に近く、2km 圏の割合では相対的に上位であることから、市面積や施設数が好結果を生んでいるのではなく、救急病院の配置が人口分布に対して適切だからとも考えられる。そのような現状は、救命力世界一宣言にふさわしいとよなかのすがたといえる。

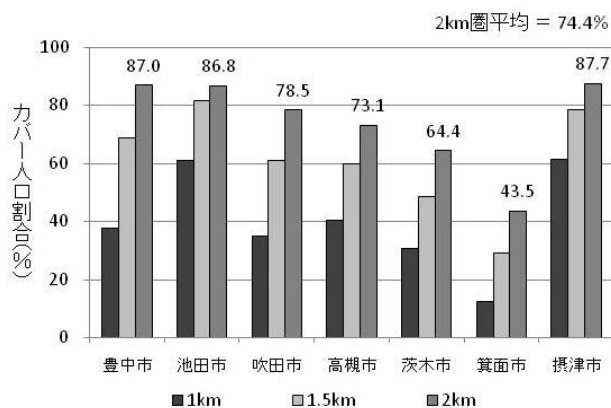


図 2 救急診療のカバー人口割合

最後に、市の救急医療サービスの課題を指摘する。複数の内科救急が選択可能な人口の割合³は、吹田市の 64.6%が最も高く、豊中市のそれは 56.4%となった。つまり、半数近くの住民にとっては救急診療の選択肢が限られており、代替案の多様性といった点でのさらなる改善の余地があるのかもしれない。(村山)

¹ <http://www.mfis.pref.osaka.jp/apqq/qq/men/pwtpmenult01.aspx> (最終アクセス日; 2011 年 10 月 26 日)

² 茨木市と箕面市のカバー人口割合が低いですが、隣接他市内の救急病院も分析に含むと、総人口の 8 割以上がカバーされる。

³ 市内救急医療機関だけでなく、隣接市外にある病院からの距離も含めて、複数の病院から 2km 圏内の合計人口の割合を集計している。

その他の活動

研究所の日々の活動の一部をご紹介します。

◆市民の方へもインタビューに行っています。

研究所機関誌『TOYONAKA ビジョン 22』Vol.15のインタビュー記事のために、豊中市民の大家玲子（おおいえれいこ）さんに、子育てをめぐる様々なネットワークについてお伺いしました。

大家さんは、お子さんのお友達やそのご両親の皆



さんとともに、外遊びをしていらっしゃいます。その中で感じられたことや子どもたちの成長などを例に、人との関係性や周囲環境を含めたネットワークについて大いに語っていただきました。

大家さんご自身、ご結婚を機に豊中市に転入された方で、引っ越し当時には服部緑地が魅力的に映ったそうです。また、「市外からの転入者でも、何かしてみたいことがあった際に、身近に、そして気軽に相談に乗ってくださる方が多いことがこのまちの無形の魅力のひとつではないか」というお話もしていただきました。

詳しくは、『TOYONAKA ビジョン 22』Vol.15に掲載予定です。（大床）

◆3名のインターンシップ生を受け入れました。

今年も大学からインターンシップ生を受け入れました。大阪大学、立命館大学、追手門大学から各1名ずつの学生が、8月から9月にかけての5～10日間、市役所の仕事を体験しました。

まずは庁内と議場の見学。その後、各自の関心にそったテーマを設定し、期間中にレポートをまとめます。今年は「協働」というキーワードを出してテーマを考えてもらいました。3人のテーマは「豊中の雇用と協働」「地域自治システムについての自主研究」「豊中市における地域教育活動における協働のあり方について」。研究員のサポートを受けながらも、各自で庁内情報を集め、関

係部署に聞き取り調査にも出かけました。最後は成果を報告し、ディスカッションで締めくくりました。短期間ではありましたが、研究所の仕事、市役所の仕事を楽しんでもらえたのではないかと思います。

説明を聞く、真剣なまなざし！



民主主義って難しそう

市役所の仕事って広範囲だなあ

就職考えてみようかな…

※コメントは研究所スタッフが作成しました。

とよなか都市創造研究所メンバー

🍁 秋も深まり…

所 長：久野恒春「今も歩いています」 🙌
主任研究員：岩佐恭子「書く！書く！ひたすら書く！」
研究員：村山 徹「深まってくれるなっ」
研究員：大床太郎「メタバだめ、絶対」
研究助手：木村直也「早寝早起き朝ごはん」
研究助手：善教将大「ももクロZに入りたーい」
研究事務員：仲谷美江「コタツがうれしい季節です」

発行日：平成 23 年(2011 年)11 月
発行：とよなか都市創造研究所
連絡先：大阪府豊中市北桜塚 3-1-28 市役所別館 3 階
TEL: 06-6858-8811 FAX: 06-6858-8801
Mail: tium@tcct.zaq.ne.jp
HP: <http://www.tcct.zaq.ne.jp/tium/index.html>